

〔特集〕

## 「働・学・研」協同でつかんだ夢の人生

——自己実現から他者実現に向けて——

白 明

内モンゴル民族大学経済管理学院

### 要 旨

人間は「夢」を抱くと、自分の人生に対して何らかの目標を立て、それを実現させるために様々な形で努力をする。それは、「夢」を叶えるプロセスでもある。そのやり方は人によって様々であるが、働き方、学び方、究め方が重要な位置を占めることは言うまでもなからう。大切なのは、それをどのように融合させていくかである。小論は、筆者が自己実現のために挑戦し続けた経験と思いを、「働・学・研」協同の視点からまとめたものである。

キーワード：働・学・研，夢，人生，自己実現，他者実現

## A dream of life realized through learning and studying while working; From self-realization to others

BAI Ming

School of Economics and Management  
Inner Mongolia University for Nationalities

## 1. はじめに

「人類はどのように進化して今に至ったのか」という問いに、最初に出てくる言葉は「働く」で、そして「学ぶ」「究める」であろう。勤勉に働き、その中から様々な物事を学びながら究めていく。そのような長い年月の中で、進化を続けたと思われる。

そして、もう一つの重要な要素とみられるのは、「夢」であろう。それは、「人間は何のために働き・学び・究めるのか」という問いを解くカギになるはず。人は、未来の自分に向かって、何らかの夢（目標）を抱え、それを叶えるために無意識的にその方向へと徐々に近づいて行く。そのため、ある程度の条件の整えやチャンスがあったら「挑戦」してみるのが重要である。筆者もそのような人間に違いないが、どれぐらい働き・学び・究めるかは、人それぞれに程度がある。その程度こそが「成功」と「失敗」を計るものであろう。

ここでは、筆者が自分の夢を叶えるために、今までどのように「働・学・研」を有機的につなげて挑んできたかという自己実現に向けた人生を振り返りながら、人材育成という他者実現に向けた新たな人生への第一歩としたい。

## 2. 生き方を求めての「夢」への挑戦

### 2.1 経済的事情で頓挫する1度目の「夢」(~1994年)

20世紀90年代の内モンゴルは、経済的に言えばそれほど発展していなかった。当時の人々の生活も貧しく、それを変えるには大学に行く様々な知識を学ぶのが唯一の出道であった。

筆者もそのような「夢」を抱いていた。しかし、大学に進学するに試験の合格はともかく、

学業や学生生活における費用のハードルは多くの若者達の足を阻んでいた。わが夢への1度目の挑戦はそのハードルを越えられずに終わった。

### 2.2 人生を変えるために試みた2度目の「夢」(1995~1997年)

上記のように1度目の夢への挑戦は、経済状況によって残念に終わったが、その後もあきらめずに野良仕事・バイトなどをしながらチャンスを待ち続けた。しかし、経済面での困難をクリアしなければ、そのチャンスがあったとしてもつかむことができない。それが、厳然たる現実であった。

「少しでも多くの金を稼ごう！いざという時に備えよう！」そのように思い、町に出て、鉄筋工場にてバイトを始めた。そこでも働きながら勉強を続けた。バイトは厳しかったが、心境は爽快であった。

人々との触れ合いや働くことの楽しみなど、様々な新しいことを体験しながら日々を過ごす。ある日、一つの朗報が耳に届いた。年に一度の「徴兵」活動が始まり、義務軍隊の募集が行われているとのこと。義務軍隊といっても、若者たちが自ら応募しなければ、誰でも徴兵されるわけではないし、応募した皆が合格できるとも限らない。いわば、当時の徴兵は、もう一つ大学受験と同じようなものであった。合格すれば、3年間の軍隊生活の中で様々な知識を得ることができるし、それを終えると軍事学校などにも入ることができる。それに、軍隊が生活すべての面倒を見てくれるので、田舎育ちの若者たちにとって、もう一つの生き方に踏み出す「夢」の出現であった。

もちろん筆者は、何も迷わずに応募し、各種の検査をクリアして、期待通りの軍隊生活が始まった。規則正しい軍隊生活の中で、自分を磨

きながら、充実した楽しい毎日を過ごしていく中、早くも3年間の終わりが近づいてきた。目標は、軍事学校で学び自分の人生を変えることであった。

しかしながら、97年の香港帰還を機に100万人の兵士が軍縮されることとなり、軍事学校に入るどころか、1年間の延期すら許されなくなったのである。

夢に向かった3年間であったが、あまりにもあっさりと終わってしまった。しかし、そこで身に付けた知識、及びチームワークの精神は、それからの仕事や生活、勉強に大いに役立っており、その習慣を失わないようにと今も心懸けている。

## 2.3 働きつつ日本留学の「夢」に挑戦（1998～02年）

永遠に軍隊から離れ、社会人として本当に自分にあった居場所を探しながら、幾つかの働き場を転々とし、あっという間に数年間が過ぎてしまった。

何より先に安定した働き場をつくろうと親戚と一緒に小さな商売を始め、同年に家庭も築くことができた。しかし、商売はそれほど景気がよくなく、家庭を築いたからには責任も重くなる。

それでも今まで描いてきた「夢」への挑戦は、あきらめなかった。そのため、当時ブームとなっていた日本留学を目指して、3度目の「夢」への挑戦を図った。今回の挑戦では、人生のパートナーも同伴だったし、仕事と日本語の勉強を両立させながらの日々であった。その後、故郷を離れた都会の塾で日本語の猛勉強に励んだ。「努力は人を裏切らず」のように2003年4月、ようやく念願の日本上陸を果たすことができた。

## 3. 「働きながら学び続ける」留学生活

待ちに待った日本留学であったが、異国での留学生活は生易しいものではなく、異国言語や異文化、異常な天気など、様々な壁にぶつかる。

### 3.1 「働きながら学ぶ」ことで乗り越えた言葉の壁（2003～08年）

2003年4月8日は、日本に初上陸した日であり、一生忘れられない記念日となった。関西空港に降り立ち、そこから北陸へと移動する。移動中には、あまりにも日本に行きたくなっていた気持ちが高じて、何度か来日したかのような懐かしさも覚えた。

日本での留学生活の始まりは、日本海側に位置する北陸地域・石川県・金沢市であった。この古くて小さな町、及び親切な人たちとの出会いこそが、筆者の人生を変える重要な要素となった。

思い返せば、最初の頃は日本語が大変難しく、アルバイト探しの電話でも「はい！はい！」しか応答できず、機械的に覚えていた簡単な自己紹介すら言えなかった。それに、当時中国で流行っていたサーズの影響もあって、来たばかりの中国人留学生の多くはアルバイトが見つからず、厳しい状況に陥っていた。

それでも、あきらめずに電話を掛け続けた結果、ようやくある「おでん屋さん」に雇用されることとなった。「赤玉金劇店」—伝統的な日本料理の店、人気あふれるメニューの数々の呼び方を覚えることと、カウンターの内側と外側から聞こえる金沢弁が「言葉の壁を乗り越える」最強の武器となった。

アルバイトをすることは、来たばかりの留学生にとって、学校で習った日本語を現場で使って磨いていくだけでなく、学校で覚えなかった

言葉なども勉強できる一石二鳥の場であった。それに、店員や日本人客とのコミュニケーションによって、日本の文化や生活習慣、礼儀なども知ることができた。まさに、「働きながら学ぶ」最高の場であった。そのお蔭で、日本語が素早く上達し、半年経った頃にはほとんどの日本人客と自由自在に会話できるようになる。いつの間にか自分から積極的に交流するようになっていた。

その後も幾つかの店を掛け持ちしながら、赤玉さんには6年間働かせてもらった。こうして、金沢の日本語学校（アリス国際学園）、金沢星稜大学での留学生生活は、円満に終わりを迎えた。

金沢を離れ、名古屋での6年間以上に及ぶ研究生活の間にも、様々な職場（JCE、セブンイレブンなど）で働かせてもらい、充実した生活を過ごした。

### 3.2 慣れ親しむ「異常な天気」（2003～15年にかけて）

日本の国土は南北が長く、季節によって各地の気候が違ったりすることも少なくない。日本人にしてみればごく普通のことであるが、大草原から来た筆者にとって金沢と名古屋の天気は本当に異常であった。

日本海側に位置する金沢では、雪が降るなか雷が鳴ると、「大嵐」のように降り出す。それが非常に不思議であった。半メートルほど降り積もった雪道を、ギアなしの自転車で走った経験と、「きんかんまなまななとっさけ、気をつけて」（道の雪が凍ってつるつるになっているから、気をつけて）と親切に教えてくれた店長の言葉が、今も脳裏に浮かんでくる。もちろん、そのきんかんまなまな道を原付きで走っていて、転んで怪我した記憶も生々しい。雪が多いだけでなく、雨も少なくない。夏場の

雨と雹のミックス、季節替わりに降る霰も驚きものである。草原で体験したことのない数々の出来事は、まさしく人生の試練場であった。金沢での6年間は、異国情緒に満ちた勉強となった。

その後、仕事関係で名古屋に引っ越し、ようやく慣れた金沢から離れることとなる。

名古屋では、雨や雪などが金沢ほどではないが、夏場の暑さや湿った空気、そして台風が訪れる確率も驚くほど高い。「太平洋側の天気と日本海側の天気は違うだろう!」。笑いながら話すおでん屋さんの店長の電話から、金沢の天気が懐かしくなったことが今も思い出される。6年間以上にわたる名古屋での生活の中で、今も思い出される一コマのシーンがある。子供を連れて庄内川沿いの芝生に仰向けしながら、晴れきった青空に浮かぶ白い雲を見つめていたシーンである。非常に幸せな一時であった。

現在、故郷に帰ってもう3年過ぎたが、大草原ならではの青空や星空は、たっぷりと楽しんでるものの、黄砂や砂嵐、及びPM2.5の時は、金沢や名古屋の天気が非常に懐かしくなる。

## 4. 「働きながら究める」研究者への道のり（2009～15年）

### 4.1 自分の未熟さに気づく（2009年、JCEに勤めていたとき）

金沢での6年間の留学生生活を円満に終わらせ、2009年3月に名古屋へ引っ越した。学部新卒にも関わらず、日中貿易関係会社の社長にスカウトされ、順調に就職ができた。今振り返れば、職を探しに転々とし、面接を重ねる人々に比べると運が良かったと思う。社長への感謝の気持ちだが、今でもいっぱいである。

大学では、日中貿易に関することについて多

少は力を入れて勉強していたこともあり、卒論も日中貿易に関する内容だったので、仕事内容に慣れるのにはそれほど困らなかった。しかし、当時の日中貿易はちょうど「尖閣諸島」問題によって冷えていたため、景気は良くなかった。後に、同じグループの旅行部の仕事にも携わったが、日中旅行もかなり影響を受けていて、会社にとっては大きなダメージとなっていた。

一方、社会人になり会社の一員としての責任はそれなりに果たせたものの、「自分の知識や経験がまだまだほど遠い！」と強く感じるようになった。それは、これからの仕事場や人生を考えたうえでの自己評価であり、なんとかしなければという焦る気持ちも半端ではなかった。そのため、自分をさらに磨こうと選んだのが名古屋学院大学だった。

#### 4.2 会社員から研究者へ—博士前期課程時代 (2010~12年)

上記のように自分をもっと磨くことを選んだからには、「ガムシャラに行くしかない」と、会社を辞めることにした。社員ではなく、バイトとしてそのまま仕事を続けながら、大学院に通うようになる。仕事と勉強を両立させていく金沢での生活スタイルが蘇ってきた。しかし、その学習への取り込む姿勢や雰囲気、および周りの環境は格別なものであった。これこそが自分を磨くための第一歩であり、そこから研究者への階段を徐々に上っていったのであった。

研究内容として選んだのはもちろん「日中貿易」に関するもので、それを中心に自分の研究を進めていった。多少の知識はあったとはいえ、研究を始めてからその奥深さに驚いた。自信満々であったものが、本当は氷山の一角にもなっていなかった。それにしても、選んだからにはやり通すしかないという気持ちを持って文

献資料探しやデーター収取、及び現地調査などをなるべく多く行うようにした。

その中、一番のハードルは現地調査だった。本当は研究者としての経験の浅いこともあり、日中貿易における現地調査をどのように行えばよいのかは全く想像できていなかった。それに、日中貿易というキーワードの範囲を具体的に示さないと、テーマも絞れない。そのため、週に一回のゼミ（有賀ゼミ）で何回も討論し、ようやく日中貿易の研究範囲を中小企業に絞ることにした。そして、その歴史的背景と発展経緯を具体的に分析しながら研究を行った。それを基に中国進出を果たしている日本企業と、中国現地の企業などの調査を行い、第一資料として研究にメリハリをつけることができた。

そのお蔭で、予定通りに修論を提出し、最後の審査まで順調にクリアできた。

#### 4.3 本格的な研究者への道選び—博士後期課程時代 (2013~15年)

##### 4.3.1 進路選択への悩み

博士前期課程をようやく修了したものの、それからの進路選びに悩まされていた。それは、「日本で就職するのか、帰国を選ぶのか、さらに研究者の道を進むのか」という三つの選択からどちらを選ぶかというものだった。

まずは、日本での就職だったが、どこかの会社を選び、就職手続きを済ませばよかった。というより修士課程を修了する前からあった幾つかのオファーの中から条件が良いのを選べば簡単にできたはず。これからずっと日本で暮らすなら一番の選択であったが、いざ帰国を選ぶとするのであればどうかな、という疑問もあった。

次は、帰国の選択であるが、「子供に母語を勉強させる」という育児問題が一番の理由だっ

た。とはいえ、育児のことは故郷へ帰れば問題ないが、現実的な学歴社会の中で、修士の学歴をもって故郷へ帰ったとしても、ちゃんとした職が見つからないのはわかっていた。

最後は、研究者の道を進むことであったが、どうみてもこれが上策と判断した。もちろん、博士後期課程を選び、博士号を狙うというのはある程度の勇気が必要であり、経済力も問われていた。それにしても、家族全員の支えと後押しのお蔭で、博士号へ挑戦をすることとなった。

#### 4.3.2 研究方向選択への悩み

博士後期課程に挑戦しようと決めた時の研究テーマ(方向)は、もちろん「日中貿易」に関するものに決定していた。そのため、ある程度の余裕を持って順調にすべりだしたともいえる。そして、普通通りにアルバイトや勉強を両立させて、日々を過ごした。

しかし、このように順調にすべりだしたかと思っただけ、普段通りに頑張りを続けた半年後のある日の博士課程ゼミにてパッと目が覚める。それは、ずっと自分に自信満々であった「日中貿易」に関する研究テーマが、急に富士山のように重く感じるようになったことだった。

それまでは、「卒論と修論が全部“日中貿易”に関してのものだったし、それに1年間就職経験があったし」と自信満々であった。

ところが、「日中貿易で本当に勝負できるか」と、指導教授の十名直喜先生から問いただされたのである。博論とは卒論・修論と別格のものであることを思い知る。研究者として「日中貿易」に関するものを研究するには卒論・修論プラス1年間の就職経験ではとても物足りなかった。それも、半年過ぎて気づいたとは、あまりにも研究者としてのあり方、およびそのような危機感がなかった証であった。

ということで、研究テーマの選択は、やむを得ず振出に戻ってしまったのである。

#### 4.3.3 研究者道の暗いスクランブルに「光」

研究テーマが振出に戻ったことによって、筆者も暗くなった研究者道のスクランブルに置かれてしまった。それは筆者にとって再度の人生への選択肢であった。このままあきらめるのか、もう一度やり直すのか、戸惑いながら迷う日々が続いた。

このままあきらめる＝家族を連れて帰国するしかない。その後の結果は決して良くないとは言えないが、どうしても残念な気持ちが残り、一生後悔するに違いない。

一からやり直すには、度重なる現実的な困難を乗り越える勇気が必要となる。というのは、研究テーマのやり直しはもちろんのことながら、家族の理解や支えが何より必要であった。

しかし、まず研究テーマが決まらないと今後が見えないため、十名先生との相談に賭けた。先生との相談によって研究者のあり方、および自分をどのように量るか、ということについて改めて分かった。

それに「あなたが本当にやりたいこと、一番向いている研究とは、何ですか。本当に日中貿易ですか」「むしろ内モンゴルの地域発展じゃないの？」先生のその一言が効いた。暗くなった研究者道のスクランブルに迷う私に、ライトアップで「光」をもたらしたかのように夜明けへと導いていった。このようによく再スタートしたが、問題は残りの2年半で博士号が取得できるかであった。というのは、研究内容によって多くの現地調査や文献探し、及び実証データ集めなどが一から必要になってくるため、これからの時間と気持ちを一心にして研究に注がないと無理に決まっていた。

しかし、家族の世話ししながら一心に研究に没頭することは不可能に近い。

困っている様子を見かねて、嫁は「子供を連れて先に帰っているのだから、その代わり（代価）に2年半で博士号を絶対取ってね！」と目をずらしながら震えた声で「下令」してくれた。そのとき非常にむなしかった。

家族と離れ離れとなり、単身赴任で研究に没頭し続けた。失敗の悔しさと家族への思いの辛さを動機にして、日々の働きと研究で乗り越えるように頑張り続けた。そして、先生にいただいたご貴重なアドバイスや適確なご指導、及び庵原さん・納富さん・杉山さん・古橋さんたち多くの先輩方の応援のお蔭で順調に進めた。

#### 4.3.4 「働・学・研」の蕾が開花

博論への二度目の挑戦が順調に進み、モクモクや愛知牧場など日本国内の多くの企業、及び内モンゴルの蒙和をはじめ、大清溝、ジュルフなど多くの企業や観光地に出かけ、実証調査を行った。指導教授の適確なご指導によって自分が向いている研究を見つけ、そのため必死に「働・学・研」協同の力を傾注した。徹夜するコンビニのアルバイトの後にも寝ずにゼミに出る。図書室にて朝から夜閉める時間まで居たりしたが、ある程度疲れていても精神面では楽であった。

そのように精いっぱい努力した甲斐あって、ほぼ予定通りに博士号を取得することができた。ご一緒に頑張っていた太田さん、井手さんと相次いで「働・学・研」の蕾を咲かせた。これまでの苦労と辛さは、学位記を受け取る瞬間の笑顔に消され、消えていった。

こうして、12年3か月にわたって滞在した日本が、わが人生の「第2の故郷」となり、豊かな思い出とともに確かな証も得ることができた

のである。

## 5. 「働・学・研」協同の経験知を教育場に活かす（2015年～）

### 5.1 ではまた～ニッポン

十数年間の日本での生活は、とりあえず幕を閉じることになった。しかし、いざ離れるとなると、「さよなら～日本」とはどうしても言えなかった。十数年間の生活によって、日本の文化や生活習慣、及び人々との繋がりなどに慣れ親しみ、物事についての考え方も日本流が身に染みている。日本で生活したからこそ様々な面で違った人生を歩むことができたのだ。

そのため、日本との繋がりを考えると、「さよなら～」より「ではまた～」のほうが適していた。「ではまた～ニッポン！3年以内に是非一回戻って思い出を探し、皆さんとお会いする」と分かれた。

（その約束を果たすきっかけとなったのは、2019年1月11日の十名教授最終講義への出席である。そこで再び、博士後期課程時代のゼミの雰囲気や満喫でき、感無量であった。「先生！本当に長い間お疲れ様でした！」……。）

### 5.2 「働・学・研」の果実が実る—内モンゴル民族大学での実践化

帰国後の生活は、思い通りに順調に進むこととなった。それは、日本で努力して咲かせた「働・学・研」協同の花が確実に実ったからだ。

内モンゴル民族大学は、内モンゴル自治区通遼市に位置する民族関係の学問を軸にした総合大学であり、2万人以上の学生を擁する。筆者は、経済管理学院（経済関係の学部）にて教師として勤めることとなった。経済管理学院は、大学全体25の学部の中で最多の学生を持つ最

大の学院である。筆者は、唯一の管理学（経営学）博士教師としてマーケティング学科に属している。

中国社会の中では、マーケティングとは「単なる売買・商売のことだ！」とみる古くからのイメージが強い。多くの大学にとっても、若くて新しい学科（中国大学で普及し始めたのはほぼ90年代に入ってからであるため）であるため、学生の集まりがそれほどではなく、専攻変更などで他の学科、学部へ移転する学生がやや多めである。このような現象をどのように改善するかが問われている。

これを一人の研究者としてどのように研究をして、どのように改善していくかというのが、これからの新しい課題として浮かび上がってきた。もちろん今まで学んできた学問と経験を活かすのが最大の武器となる。苦勞しても、努力して研究者の道を選び、博士号を取った甲斐があったなと改めて感じるこの頃である。そう思うたびに、日本留学を選んだこと、十名ゼミに入り、皆さんと一緒に頑張ったことが、最高の選択であった、と強く感じる。

このような海外での研究経験や苦勞があったからこそ、これぐらいの課題はそんなに難しく感じておらず、意気高く挑戦するつもりである。

もちろん大学に勤めているからには、これだけではなく、教育や研究など様々な問題を解決していかなければならない。そのためにも、「働・学・研」を有機的につなげていくのが最も良い方策である。

## 6. おわりに

夢をあきらめずに追いかけたお蔭で、今日の

成果がある。単なる夢だけに終わっていたならば、今の自分はいない。しかし、夢とは人間の未来を描かせる魔法でもある。その描いた道を歩むために人間は、働いたり、学んだり、究めたりするのである。働くことから学ぶことができ、学ぶことから働くコツをつかむ。そして、それを基礎に更に究めていくのである。「働・学・研」の絶えない繰り返し、いわば「働・学・研」協同の良循環によって発展していくのだ。

筆者は日本での生活を通して、創造的で豊かな人生をつくりだしていく知恵とノウハウを学んだ。これからも、引き続き日本との繋がりを大切にしていき、さらなる「働・学・研」協同の生き方を磨き光らせようと思っている。

## 主要業績

白明 [2018] 『複合型産業経営と地域創生—内モンゴルの6次産業への日中比較アプローチ—』三恵社。

白明 [2015] 「持続可能な地域・産業づくりと複合型経営—内モンゴルにおける農林牧畜業への日中比較アプローチ—」十名直喜編『地域創生の産業システム』水曜社。白明[2015]「内モンゴルにおける複合型経営の構築に向けて—日本の農牧業の6次産業化に学ぶ—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第18号。

白明 [2014] 「内モンゴル産業の持続的発展と環境保全—日本と内モンゴルの比較視点から—」（日本日中関係学会HP）。

白明 [2014] 「内モンゴルにおける産業経営と地域発展—持続可能な複合型経営への日中比較アプローチ—」『経済科学通信』基礎経済科学研究所。